

令和 8 年度 東京都内湾水生生物調査 付着動物調査 速報

●実施状況



令和 8 年 5 月 22 日に付着動物調査を実施した。天気は雨後曇りで、気温 15.5～15.9℃、中央防波堤では北北西の風 5.5m/s、13 号地船着場では北の風 1.2m/s であった。調査当日は中潮で、満潮は 7 時 34 分、干潮は 15 時 14 分であった(気象庁のデータ)。調査地点では貧酸素状態(2.0mg/L 以下)は確認されなかった。

各地点の概況を以下に示す。

調査日 2026/5/22	中央防波堤外側(その 2)東側		13 号地船着場	
調査時間帯	8:15～9:19		9:28～10:30	
水深(m)	8.4		9.5	
天候	雨		曇	
気温	15.9		15.5	
風向/風速(m/s)	NNW/5.5		N/1.2	
波浪(m)	0.3		0.3	
水色	暗灰黄緑色		暗灰黄緑色	
透明度(m)	2.9		2.5	
観測層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	20.0	19.9	20.4	19.2
塩分(ー)	25.4	30.3	25.5	30.3
pH(ー)	8.2	—	8.2	—
DO(mg/L)	6.9	5.6	7.5	4.3
DO飽和度(%)	88.3	73.8	96.2	56.3
水の臭気	無臭	無臭	無臭	無臭
備考	赤潮状態ではなかった。 下層では貧酸素状態は確認されなかった。		赤潮状態ではなかった。 下層では貧酸素状態は確認されなかった。	

観測層:上層(0m)・下層(海底面上 1m)

●調査地点の状況

	中央防波堤外側(その 2)東側	13 号地船着場
概況写真		
備考	中央防波堤外側埋立地の外側護岸はしご付近に調査地点を設定。	中央防波堤埋立地へ通じる第二航路海底トンネル排気塔の南にある船着場西側護岸に調査地点を設定。

●観察結果概要

○中央防波堤外側(その2)東側

被度(基盤を覆う面積比)が高かった種は、A.P.(荒川工事基準面)からの高さが高い方からイワフジツボ、タテジマイソギンチャク、カタユウレイボヤ等であった。ムラサキイガイは目視では確認されなかった。

イワフジツボは A.P.+ 2.2m~+1.4m、タテジマイソギンチャクは A.P.+1.5m~-1.2m、カタユウレイボヤは A.P.-1.2m~-4.0m の範囲でそれぞれ被度が高く、A.P.からの高さ(水深)によって付着生物相に違いが見られた。

マメボヤ目のセイウツツボヤが本調査で初めて確認された。

護岸前面の底質は泥で、多毛類の棲管やイソギンチャク類が確認された。

○13号地船着場

被度が高かった種は、A.P.からの高さが高い方からイワフジツボ、マガキ、ヒドロ虫綱、カタユウレイボヤ等であった。

イワフジツボは A.P.+2.2m~+1.3m、マガキは A.P.+1.6m~+1.1m、ヒドロ虫綱は A.P.+1.0m~-3.6m、カタユウレイボヤは A.P. -0.1m~-3.6m の範囲でそれぞれ被度が高く、中央防波堤と同様に A.P.からの高さによって付着生物相に違いが見られた。

護岸前面の底質は泥で、イガイ類等の貝殻が堆積する中にイソギンチャク類が確認された。

○地点間の比較

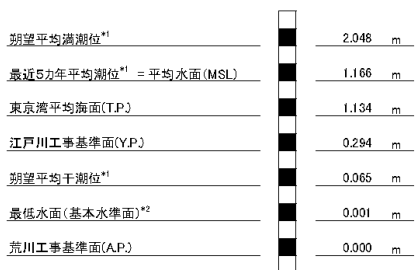
東京湾湾奥の付着生物相で主要な構成種となっているムラサキイガイ(外来種)は、平成31年度以降非常に少なくなっている。今回、中央防波堤では確認されたもののごくわずかであり、中央防波堤、13号地船着場のいずれにおいても目視では確認されなかった。従来ムラサキイガイの被度が高かった場所には、中央防波堤ではタテジマイソギンチャク、ヒドロ虫綱が、13号地船着場ではヒドロ虫綱、カタユウレイボヤが、それぞれ被度が高かった。

【参考】潮間帯、潮下帯とは

潮間帯とは、潮の満引きで水面が移動する部分のこと。東京湾では平均海面(T.P.)を挟み、約2mの高さが相当する。これに対して、その下側の干上がらない部分を潮下帯と言う。

環境の変化は激しいが、適応した特有の生物が生息・生育する。通常、干出時間への耐性等により、水平に棲み分けた状態(層状構造)となっている。

東京検潮所の潮位実況図



^{*1} 2014年~2018年の平均値

^{*2} 2014年~2018年の平均値

・この潮位表の検潮地点は、北緯35° 39'、東経139° 46'の気象庁東京検潮所(東京都中央区晴海5丁目南面地先)です。

・この潮位表は、A.P.を基準としています。

・この潮位表は、気象庁のホームページより公開されている2020年潮位表(東京)より作成しています。

潮間帯

水面が上下し、水に浸かったり干上がったりする

潮下帯

水面から出ない部分

(図は、東京都港湾局 令和2年東京港潮位表から引用)

<主な出現種>



イワフジツボ

殻の直径が 1 cm ほどの小型のフジツボ類。主に潮間帯の上部に生息する。東京湾内湾では最もよく見られる種のひとつである。



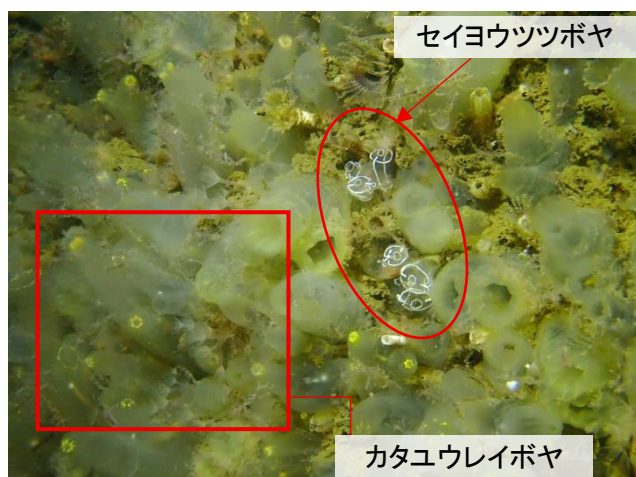
マガキ

岩礁帯には殻長 20 cm を超える個体もいるが、護岸では殻長 5 cm ほどの小型の個体が多い。淡水の影響を多少受ける河口部等の潮間帯から潮下帯に生息し、東京湾では普通に見られる。



ヒメホウキムシ

体長 1.5 cm ほど。キチン質の棲管に棲み、岩礁や護岸に群生する。触手冠を持ち、ケヤリムシやイソギンチャクのような姿であるが、箒虫(ほうきむし)動物という別の動物門に属する。

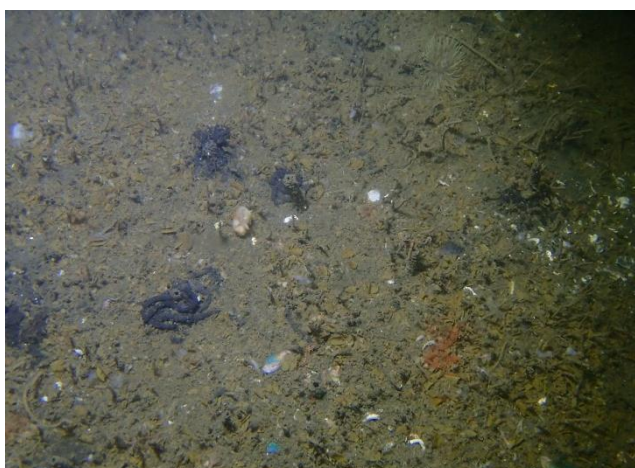


セイヨウツツボヤ

カタユウレイボヤ

カタユウレイボヤ: 体は半透明で、体長 10 cm ほどになるホヤの仲間。東京湾では普通に見られ、内湾域の岩礁や護岸等の基質に群体を作って付着する。プランクトンを濾過して食べる。
 セイヨウツツボヤ: ヨーロッパ、大西洋原産の外来種。本調査では初出現となる。

<海底状況>



海底の底質は泥で、多毛類の棲管やイソギンチャク類が確認された。



海底の底質は泥で、イガイ類の殻が堆積する中にイソギンチャク類が確認された。

<その他の出現種>



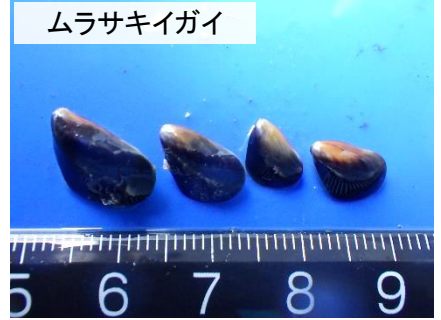
ウスカラシオツガイ

殻長 2cm ほど。殻の形態は変異が大きい。護岸のマガキやムラサキガイ等が密集している場所に埋在していることが多い。東京湾内では1989年に京浜運河で初めて記録された外来種で、原産地は不明。(両地点で確認)



コウロエンカワバリガイ

1970年代後半に国内で発見された外来種で、東京湾では代表的な付着生物。ムラサキガイよりも淡水の影響の強い水域に多く、汽水域の港湾岸壁で大群生が見られる。(両地点で確認)



ムラサキガイ

港湾の防波堤等に高密度に付着する。貧酸素化に伴う大量への死により、水質や底質の悪化を引き起こすことがある。東京湾の代表的な付着生物であったが、近年は湾内全域で大きく減少している。(中央防波堤で確認)



カンザゴカイ科

棲管

石灰質の棲管を護岸や貝殻等に固着させるゴカイの仲間。頭部の鰓冠(さいかん)をひらひらと伸ばし、懸濁物を食べる。それぞれの個体は小さいが、群生して大量に固着し、設備や養殖貝類等に悪影響を及ぼすことがある。(両地点で確認)



ドロクダムシ属

体長 7 mm ほどになるヨコエビの仲間。腕のように見える大きな第二触覚が特徴。泥等で管を作り、そこに棲む。内湾等で多く出現する。今回の調査では、中央防波堤で非常に多くの個体が確認された。(中央防波堤で確認)



ワレカラ属

ヨコエビと近縁の小型甲殻類(端脚類)。ワレカラ類は、海藻類のほか、定置網やロープ等の海洋構造物にも付着する。東京湾には、トゲワレカラ、クビナガワレカラ等が生息する。(両地点で確認)



ナンオウフジツボ

卵塊が見える

南ヨーロッパ原産の外来種。令和5年度に本調査において、東京港内で初確認されて以降毎年出現しており、今回は殻径 2cm ほどの大型個体が出現し、卵塊が確認された。(13号地船着場で確認)



チビクモヒトデ属

6本の腕を持つ小型のクモヒトデ。カイメンや岩の間に潜む。クモヒトデはいわゆるヒトデとは別の仲間。内臓の入っていない細い腕と中央部にある盤がはっきりと分かれているのが特徴。今回の調査では、中央防波堤で7本腕の個体が採集された。(両地点で確認)



タテジマイソギンチャク

体の幅が 1.5cm ほどの小型のイソギンチャク。オレンジのタテジマ模様が名前の由来。岩礁・転石や護岸壁のカキ殻等に付着して生活する。(両地点で確認)